

氏 名	山田 和夫
学 位 の 種 類	博士（人間文化）
学 位 記 番 号	第16号
学位授与の日付	平成24年 3 月23日
学位条件の要件	学位規程第 3 条第 2 項該当（人間文化研究科）
学 位 論 文 題 目	ラフカディオ・ハーンの越境性と時代性 Lafcadio Hearn: Beyond and/or Within the Boundary
論文審査委員	（主査） 教 授 田中 敬子
	（副査） 教 授 土屋 勝彦
	（副査） 准教授 谷口 幸代

1. 学位論文の内容の要旨

本論文は、ラフカディオ・ハーンの越境性と時代性について論じたものである。まずハーンのアメリカ時代のフィクションで彼の自然観、文明観とからめてその越境性を考察する。次にこの時代の主流思潮であったハーバート・スペンサーの影響を受けながらも独自の自然観を築いたハーンが来日後、その自然観と文明観をどう変化させ、日本での自らの立場を考えるに至ったか、越境の成否とともに分析する。そのために本論文では、アメリカ時代と日本時代の作品を比較して論じ、以下の3点を証明する。

1点目はハーンが独特な自然観、文明観を形成していき、それが彼の文化多様性開眼に寄与したことである。彼はニューオーリンズなど近代西欧文明の象徴である大都市でジャーナリストとして働いたが、1888年マルティニークへ移り住む。その地で書かれた中編小説『チータ』には独特の自然観・文明観が込められた。カリブの大自然を19世紀末のファム・ファタル的な妖艶なイメージで捉える考え方と、生産力と破壊力をあわせもつ実母のイメージで捉える考え方が、作品中で表現されている。また、大自然の猛威から人間を庇護する文明の力を、子供を守り育てるという親の義務を自覚的に引き受けた養母のイメージで捉える考え方も芽生えている。ハーンの考える自然と文明の関係は、アメリカ時代から日本時代で、両者拮抗の関係から文明への傾斜へと変化する。

2点目は、上述の独特の価値観故に、ハーンは当時の西欧中心の風潮の中では多文化主義的視点、越境の視点を育む可能性を持っていたことである。自然を文明が征服すべきものではなく、人知では推し量れない不可知な畏怖の対象と見なす姿勢は、あらゆる非西欧の諸文化に対する暖かい視線につながった。雑種性、異文化の混合が強烈なニューオーリンズやカリブ海世界と接触した時点で、ハーンには異文化への関心、文化を横断する越境のテーマも生まれており、『ユーマ』にはそれが表れている。このことは彼にとって後の日本文化受容の下地となった。

3点目は、1890年の来日を期にハーンが文化を横断する越境の難しさに直面し、その難しさを作品中で発展させたことである。『怪談』に代表される来日後の再話作品は、昔話・伝説などを言い伝えのまま採取したのではなく、また現代的な表現に書き変えただけでもない、ハーンの独自性が強く込められた作品となっている。そこでハーンは、実母的自然の猛威から人間を守る庇護者を養母ではなく、家制度という日本的な家と人との契約のイメージで捉えるようになった。本論では3つの再話作品「破られた約束」「和解」「雪女」を例に挙げ、この点について詳しく検証する。そして、「耳なし芳一の話」を例に挙げ、異界と人間界の狭間で揺れ動く主人公芳一の境遇に、日本と西欧のどちらにも帰属しきれない晩年のハーンの心境が映し出されていることを示す。

アメリカ時代のハーン作品に描かれる「養母」の契約が子供と親の間のものであるのに対し、来日後に描かれる家制度の契約は、社会を構成する大人同士のものであり、守るべき対象は子供でなく家制度である。同じ文明の象徴でも養母のほうが自然に近く、家制度のほうが自然から遠い。アメリカ時代に比べ、文明の持つ力に一步近づいたという点で、日本の家父長制内に入るとはハーン作品における重要な要素となった。しかし文明の枠内に押し込まれたハーンは、姑や村人たちに敬愛された雪女同様、本来のパッションを解放できず日本の家制度に従順な家父長となる。雪女の哀しみにはハーン自身のジレンマや、一時は理想郷と思われた社会への幻滅が見え隠れする。

「耳なし芳一」では、芳一は亡者たちから請われ、自分の力を発揮できる異界へ越境しようとするが、文明の力によって人間界へ帰還する。一方ハーン自身は、日本社会への越境の困難さから、晩年は新たな異界を模索したりアメリカ回帰を考えたりもする。列国の帝国主義に倣いその後を追う当時の日本の風潮の中で、攘夷思想の強まりにより、お雇い外国人を排斥する気運が高まった。その影響でハーンも東大での職を解雇され、日本での安定した立場が揺らぎ始める。日本語も不得手で思うように社会に溶け込めず、長男の教育はアメリカで受けさせたいという気持ちも強まる。一度は異界へ足を踏み入れたが最終的には人間社会へ回帰することになった芳一の余生に、晩年のハーンの揺らぎの状態が映し出されている。その状況下で『怪談』は生み出され、ハーンは節子が日本語で語った物語を英語で筆記し、それを英語圏の読者向けに出版し続けた。

『怪談』は作品としては結実したが、ハーン自身の日本社会への越境は、異文化の狭間で最後まで揺れ動き完結することがなかった。列強国の後を追いかける当時の日本の姿勢への懐疑と、一方で自身は日本に対し絶対的優位を保つ西欧文明の一員であるという再認識が同時期に訪れ、幽遠な日本古来の文化への愛着と葛藤して、晩年のハーンの再話には揺らぎと曖昧さが漂う。このことをハーンの『怪談』を中心に実証する。

結論は、以下のようなものである。ハーンは大自然を実母、文明を養母のイメージで捉える独特な自然観・文明観を持っており、この価値観は自然を征服すべきものではなく畏怖の対象とする考え方となり、それ故ハーンは当時の西欧中心思想の風潮の中では多文化主義的視点、越境の視点を育んでいた。カリブ海地域という周縁世界を舞台に『チータ』、『ユーマ』など多文化主義

を感じさせる作品を残し、来日後は同じく周縁世界である日本を舞台にして、近代西欧から隔絶した旧日本の文化を描いた。西欧文明の進歩的優位性を認める価値観において、確かにハーンはハーバート・スペンサーの『第一原理』に傾倒するなど、社会ダーウィニズムに依存した面もある。しかし彼の根底には常に単なるリアリズムの世界を越えて異文化を受容する姿勢があった。それがロマンチックな性癖によるとしても西洋文明の境界を越える意図は明らかであった。

一方日本時代の特に関心は、西欧文明に対する嫌悪感の延長として、列強国の後を追いかける明治日本への嫌悪を露にしている。ハーンの文明世界から異界への越境は完結することなく最後まで揺れ動き、このため見かけは単純な再話だが、揺れ動く曖昧さが独特の味わいを残す「耳なし芳一の話」のようなフィクション性の高い作品が生まれた。一方、自分は日本に対し絶対的優位を保つ西欧文明の一員であるという否応ない再認識も同時期に訪れている。ハーンが越境性と時代性の狭間で揺れ動いていたことが、彼のアメリカ時代と日本時代を結びつけて論じることにより、証明できると考える。

2. 学位論文審査の要旨

本論文は、ラファディオ・ハーンの示す越境性について、時代の言説の制約を超えてどのような越境を試みたのか、その成否について、また越境への志向が彼の文学性とどうかかわるかを論じたものである。山田氏はまずハーンのアメリカ時代の作品を取り上げ、彼の自然観、文明観と絡めて越境へ向かう萌芽を作品中に考察する。そしてハーンが時代の主流思潮であったハーバート・スペンサーの影響を受けながらも独自の自然／文明観を培ったこと、それは猛威をふるう実母的自然と養母的文明の均衡という形で彼の作品に現れること、大自然の威力を十分認識したハーンが非西洋文明への温かいまなざしを持っていたことを指摘する。彼の作品に登場する養母が混血であることも、人種越境の点から強調される。またアメリカ時代のハーンの作品は、フィクションを目指しながらも民話やエスノグラフィー的要素も交じる点で、フィクションというジャンルの境界を越えようとしている点も指摘される。

マルチニク時代を経てハーンの立場は次第に文明の側へ向かい、来日後、ハーンの商品中の文明を表象するのは「養母」ではなく日本の「家制度」となる。養母が代表するのは、子供への自然な愛情と、生母でない人間が母となることを可能とする法制度が調和した文明観である。しかし日本では、個人ではなく家を守ることを本来の目的とした家制度がこの国の文明を代表する。来日後のハーンの再話では、アメリカ時代のフィクションに顕著な親子関係の話よりも男女の約束の遵守、破約が主なテーマとなる。そこで山田氏は家制度に代表される文明においては、女性はその社会を離れて異界の魔物となって初めて、男の破約をなじり、反撃できる、と分析する。再話作品中の女性は、実母的自然と一体となって文明に対峙する。山田氏は、ハーンが小泉家の養子、家父長となって、一旦は放浪から解放されて異国の文明にある種の安定感を得たが、日本の急速な近代化、軍事大国化への歩みに大きな失望を覚え、自らの疎外感を再話中で表現しようとしたと考える。「雪女」や「耳なし芳一」にはハーンのそのような微妙な立場が伺える、とし

て特に「耳なし芳一」では、ハーンの手紙など二次資料を用いながら、その論を立証する。『怪談』という再話は、ハーンにとって限りなくフィクションに近い表現手段ともなったのである。ハーンはマルチニーク時代に自然と文明の均衡をイメージしたが、来日後、西洋とは全く違うが一つの優れた異文化を持つ国を尊び、その文明へ傾斜していった。しかし最終的にハーンは、自分が異国へ越境を果たしたのではなく、疎外された状況の中で、巨大な西洋文明であるアメリカ合衆国の庇護を求めざるを得ない立場にいる、という認識に近づく。山田氏はそう考える一方、「耳なし芳一」の結末を考察して異界と現世の間にたたずむ孤独な主人公にハーンを重ね、日本にも西洋にも属しきれない立場がハーンの魅力であると結論する。ハーンの越境の成否は両義的、むしろ失敗と言えるのかもしれないが、そこに彼の限界と文学的意義があるという結論が導き出される。

本論文の独創性について

ハーン研究は民俗学から文学、異文化論まで広範囲にわたっている。最近では異文化コミュニケーションの立場やクレオール論、越境論からハーンを見直す動きも広がっている。その中で山田氏が試みたのは、アメリカ時代と日本時代をまたがって彼の作品をフィクション、再話中心に考察し、個々のテキストのテーマとジャンル双方からハーンの越境性を見出すことである。特に、当時の主流思潮であったスペンサーの社会ダーウィニズムや自然観に影響されつつも独自の自然観、文明観を築き、西洋文明の絶対優位性にとらわれなかったハーンの柔軟性、またエスノグラフィ的な作品から再話まで、民俗的な語りに寄り沿うなかでもフィクション性を発揮するジャンルの越境性が強調される。そのうえで『怪談』の主人公たち、特に雪女と芳一にハーンの晩年の心境を重ね合わせ、越境しきれない、または越境に失敗する状況をハーンの文学的特質とする。

アメリカでのハーン研究はアメリカ時代の作品に偏り、日本におけるハーン研究は古くは日本での作品に偏っていたが、近年は西成彦、ジョージ・ヒューズ、宇野邦一、牧野陽子ら、西洋文化と日本文化にまたがった視点からの優れた研究書が日本で出ている。山田氏の場合、ハーンの実母的自然観と養母的文明観を強調し、マルチニーク時代の彼のフィクションにおける両者の均衡、混血の養母がもたらす多文化性の重要性にも考慮が払われている。さらに日本時代、家制度と実母的自然界の対立を描く再話を経て、最終的にハーンが現実には日本からの脱出も考えていたことから、ハーンが非西洋文明への越境を果たせぬまま、西洋と非西洋のはざまにたたずむ姿を自らの再話の主人公と重ね合わせた、という大胆な考察をする。スペンサーの影響下でのハーンの独自性はこれまでも議論されているテーマであり、それだけでは山田氏の論は今までの議論から特に新たに付け加えるものではない。しかしハーンがスペンサーの不可知論的自然観を用いて19世紀末のファム・ファタール的なイメージの自然観を超えていったこと、それを実母の自然として独自に養母的文明と対比させたことなど、新たな観点を提示し展開したことは評価に値する。また、牧野陽子も混血の養母には注目しているが、牧野は養母と文明の関連性よりも、むしろ当時の孤児文学を背景にハーンのアメリカ時代のフィクションを論じる。それに対し山田氏は、同

時代の作家ケイト・ショパンの描いた黒人乳母像と比較する、という手法をとり、人種、異文化の問題に焦点をあてる。またニューオーリンズについてのハーンの見解については、同時代にニューオーリンズを訪れたマーク・トウェインの見解と比較して都市文明に対する両者の見解の差を明らかにしており、ハーン其自然観と文明観の議論に厚みが出ている。

日本時代では、日本の家制度が養母的文明に変わり、実母的自然と対峙するさまが『怪談』中心に分析されており、その論は納得できるものとなっている。さらに「雪女」「耳なし芳一」では、再話に自らの状況を読み込むハーンのフィクションへの傾斜を指摘する。日本でのハーン再話作品研究が、再話の元の出典との対比中心に行われていたなかで、その考察は興味深い。また、アメリカ時代と日本時代を通して個々の作品のテーマとジャンル双方に越境性を探り、アメリカ合衆国という帝国から越境しきれぬ晩年のハーンまでたどってその立場を彼独自の文学性へ結びつける過程は論理的であり、納得できる結論に至っている。

本論文の問題点と今後の課題

本論文の問題点としては、越境性を様々な分野に見ようとした結果、ここで追及する越境性とは何か、という定義を最初に押さえることがおろそかになったことである。ハーンが活躍した時代の思潮、言説を超える観点に彼は到達したのか、実際に国境を超え、異文化へ越境したのか、ジャンルの越境なのか言語の越境なのか、さらに彼は文学的にどう越境したと言えるのか、といった問題はそれぞれ論じられている。しかしさまざまな越境の関係を結論部分で包括的に明示していないので、各部分の詳述に比して全体の印象が散漫になるきらいがある。また、スペンサーの自然観、文明観との違いについては、スペンサーのテキストをより多く引用したほうが説得力を増したであろう。社会ダーウィニズムに回帰したようなハーンの見解も、第4章の議論では詳しく紹介すべきであっただろう。最も大胆な考察である『怪談』の再話にハーンが自らの状況を込めた、という点についても、二次資料からのさらなる補強があるとよい。最後に付録としてつけられたハーンの日本語訳の全集と、アメリカで出版された全集を突き合わせたリストは、ハーンの英語版テキストがどこまで日本語で出版されているかを知る上で、貴重な資料となるものである。ただ、アメリカ時代の新聞記事やエッセイを収集して、アメリカで単行本として最近出版されているものについては日本語の全集との照合がされていない。こちらも資料に加えてあれば、日米のハーン研究者にとって便利になるとと思われるので、今後の資料追加が期待される。

3. 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨

3名の審査委員は本論文を精読・審査し、2012年1月23日(月)、午後7時より約1時間、山田氏に対し最終口述試験を行った。最初山田氏より20分間、博論の要旨の説明があった。その後質疑応答に入り、審査委員からの質問に対し、山田氏は誠実に答え、細かい点の補足、自説の補強を行った。土屋教授からはまず、越境の定義のあいまい性の指摘、さらに博論第1章に関して、ハーンとの比較で同時代の作家たちの中でショパンを選んだ理由について質問があった。山田氏

はこの博論での越境という言葉のあいまい性は認めつつ、越境を多様な角度から論じた意義を強調した。ショパンとの比較については、両者ともマイノリティに強い関心を寄せ、自分たちのマイノリティ性に敏感であった点などを丁寧に説明した。土屋教授からはさらに家父長制とファム・ファタールについて、西洋と日本の差異にハーンが気づいていたかどうか、ハーン作品中の全能の語りと登場人物の限定された語りと家父長的権威の関係について、また『チータ』における多言語性指摘の詳細などについて質問とコメントがなされた。山田氏は、前者の問題については今後の課題とする旨、答えた。多言語使用については補足説明ののち、来日後はハーンの多文化性は言語よりもむしろテーマのほうに顕著であるとし、その根拠を挙げた。土屋教授からは、芳一とハーンの同定について、興味深いはまだ納得するだけの証拠がそろわないのではないかと、という意見も出された。ついで谷口准教授からは、やはり越境という言葉のあいまいさの指摘があり、ハーンの研究史における山田氏の博論の位置づけについての説明が求められた。また、『怪談』でハーンが登場人物と一体化する傾向、ハーンの越境の成否のあいまい性と彼の文学性について更なる説明が求められた。山田氏は、自分の博論と宇野邦一や牧野陽子の研究との違いを述べ、晩年のハーンの心境の矛盾を説明しつつ、ハーンの具体的な意図推定の困難は認めた。主査の田中からは、特にハーンの日本時代の解釈において、二次資料からの更なる補強が希望された。博論付録の資料については、口述試験委員は全員評価したが、まだ補遺が必要であることも確認した。

山田氏の論文の一部は国際アメリカ学会北京大会で口頭発表して好評であり、日本アメリカ文学会中部支部でも他の一部を発表し、人間文化研究科紀要にも掲載されている。口述試験では、全般として、アメリカ時代から日本時代にいたるハーン其自然観、文明観について山田氏が主張する変化、独自性、ハーンの越境の両義性と文学性の相関性の確認について、山田氏の説明を了承した。

4. 学位授与についての意見

各審査委員が本論文を慎重に精読・審査し、口述試験を行った結果、山田和夫氏の論文はラファディオ・ハーンの越境性を彼の文学性と結びつけ、アメリカ時代と日本時代を通して彼の作品を越境論、文化批評的な側面を交えて考察し、独自の見解を提出したものとして認められる。その見解を立証する二次資料からのさらなる補強が望まれること、結論で越境論と文学論を包括するマクロ的な視点が少し弱い、という弱点はあるが、ようやく盛んになりつつある越境論からみた野心的なハーン論として、審査委員は一致して申請者に博士（人間文化）の学位を授与するのにふさわしいと判断する。